

See You in the Next World, Professor Yamawaki!

大野 龍浩

それはもうすぐ学部3年生を終える春休み頃だったか。卒業論文のテーマを決めるために、福岡市天神にある紀伊國屋書店の英文学書コーナーで立ち読みをしていた時、山脇百合子先生の『ギヤスケル研究』（北星堂書店、1976）と『英国女流作家論』（北星堂書店、1978）がふと目に留まった。平明な文章で書かれた作家の生涯や代表作のあらすじを読みながら、興味を覚え、買い求めた。なかでも、とくに心惹かれたのは *Sylvia's Lovers* だった。

1980年代当初、エリザベス・ギヤスケルは無名に近かった。テキストも Oxford World's Classics 版や Penguin 版などなく、Dent 版をようやく手に入れた。専門書も日本語によるものは山脇先生の一冊のみで、英文のもので手に入った書籍は W. A. Craik, *Elizabeth Gaskell and the Provincial Novel* (Methuen, 1975) と Angus Easson, *Elizabeth Gaskell* (RKP, 1979) だけだった。19世紀英国の小説家の中でも、ジェイン・オースティン、チャールズ・ディケンズ、ブロンテ姉妹、ジョージ・エリオット、トマス・ハーディのような主流作家は、研究者に事欠かない。わたしはそうでない人を対象にして開拓者になろうと目論んだ。

いまは亡き指導教官でシェイクスピア学者だった蛭原 啓先生に意向を伝えたところ、「ギヤスケルは研究する人が少ないから、やり甲斐があるでしょう」と言って下さり、こうしてわたしの卒論のテーマは決まった。一人の女性を誠実に愛した凡庸な青年を描く『シルヴィアの恋人たち』は、わたしの性に合った。英語による小説を読んで涙したのはこの小説が初めてだった。以降、大学院でもギヤスケル研究を続けることにし、*Cousin Phillis* や *Ruth* について論文を書き、修士論文では *Mary Barton* を扱った。博士課程に進む頃には、ギヤスケルを生涯の研究テーマにしようと思うようになっていた。

愛媛大学に就職して間もなく、日本ギヤスケル協会が設立される旨、月刊誌『英語青年』（研究社）で知り、さっそく山脇先生に手紙を書いた。そのせいか、

1988年10月16日に協会設立大会が実践女子大学で開かれた際には、発起人の一人にわたしの名前があった。この時、敬愛する大先生に初めてお目にかかった。当時の会員名簿には83名の名前があり、そのうち今でも残っておられるのは、下記の17名(敬称略)——芦澤久江、阿部美恵、石塚裕子、金子史江、小池 滋、小松郁子、杉村 藍、鈴江璋子、鈴木美津子、多比羅真理子、玉崎紀子、角田米子、中村美絵、中村みどり、宮園衣子、脇山靖恵、それにわたし。



2007年大会にて
(9月30日、中央大学駿河台記念館)

以降、何かにつけて、先生には目をかけていただいた。翌年10月15日の第一回大会における研究発表に誘ってくださったり、協会の役員に加えていただいたり、もったいなくも、実践女子大に誘っていただいたり、会長に推薦して下さったりしたこともある。いまでこそ日本におけるギヤスケル研究者の数も増えたが、当時は本当にほとんどいなくて、わたしがその数少ない研究者の一人で、新進気鋭だったからだと思う。

その後、山脇先生が蒔かれた種をあとに続く者たちが着実に育てた。ギヤスケル協会は、作品の日本語訳や論文集の出版を行い、昨年2018年に創立30周年を迎えた。わたしもそのうちの一人として、微力を尽くした。いまでは、研究者としての学識を深めるべく周辺作家も研究対象に広げているが、やはりその中心はギヤスケルだ。彼女のことをいまだにマイナー作家視する英文学者もいるけれども、彼女の文学はまだまだ開拓の余地がある。周辺の他作家と比較しながら、文学史におけるその客観的な位置づけを試みるのも大切な作業だ。

というわけで、今日のわたしがあつたのも、けっきょくは山脇先生のご著書のおかげ。今頃は来世でギヤスケルと話をされていることだろう。いずれわたしもその仲間に加えていただく日が来るはず。そのときによい報告ができるように、現世でできるだけのことをするつもりです。

(日本ギヤスケル協会第4代副会長、熊本大学大学院教授)